



Title	自然習得者における中間言語的特徴の定着化：自然談話データにみる連体修飾表現を中心に
Author(s)	小田, 佐智子
Citation	阪大日本語研究. 2016, 28, p. 53-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55458
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自然習得者における中間言語的特徴の定着化 —自然談話データにみる連体修飾表現を中心に—

Stabilization of interlinguistic features by non-native speakers
who acquired Japanese in natural setting:
Adnominal expressions of natural conversational data

小田 佐智子
ODA Sachiko

キーワード：自然習得 連体修飾表現 中間言語的特徴 定着化

要旨

本研究は、来日し、日本語習得を開始して10年前後の自然習得者にみられる連体修飾表現の運用を記述し、中間言語的特徴の定着化の様相を明らかにすることを目的とした事例研究である。分析は、タイ語を母語とする自然習得者2名と、同じくタイ語を母語とする教室学習者2名の談話データを対象に進めた。分析の結果、以下の点が明らかになった。

- a) 自然習得者は、連体修飾表現の使用が教室学習者に比べ少ない。これは、コ系指示詞を用いた情報付加によって、連体修飾表現を回避していることが要因として考えられる。
- b) 自然習得者は、動詞による連体修飾節の使用が極めて少ない。日本語の連体修飾節はインプットにおいて形式的な手掛かりがないため、連体修飾節に気づかず、分析ができないため習得、使用が少ないのだと考える。
- c) 自然習得者の中間言語的特徴の定着では、「ノ」の脱落、他の助詞による「ノ」の代用、「ノ」の過剰使用が認められる。これらの特徴は習得初期から出現しているものと考えられ、それが定着して使用されていると指摘できる。
- d) 自然習得者の中間言語的特徴が定着した背景には、日本語に連体修飾表現であることをマークする関係代名詞などがいないために、インプットを分析して連体修飾表現を作り出す方法を習得することが難しいことに加え、中間言語的特徴に対する母語話者などからの否定的反応があまり得られないことによると考える。

1. はじめに

本稿は、日本語を自然習得した習得者の連体修飾表現の運用を記述し、その中間言語的特徴の定着化の様相を明らかにすることを目的とするものである。

第二言語習得の現場では、母語話者の文法規則とは異なった非母語話者に特徴的な言語使用が認められる。このような言語使用は、教室学習の場では「誤用」や「間違い」と言われ、取り除くべき対象であった。これに対してSelinker (1972) は、非母語話者が使用する言語体系

は、母語（以下L1）と目標言語（以下L2）の「中間」に位置し、L1ともL2とも異なる独自の体系を持った自然言語の一種であるとして、「中間言語」という概念を打ち出した。「中間言語」の観点に立てば、非母語話者独自の言語使用は「誤用」や「間違い」という取り除かれるべき現象ではなく、非母語話者が確立した言語体系の特徴の一つであるという考えができる。本研究では、中間言語研究の立場に則り、母語話者とは異なる非母語話者独自の特徴を「中間言語的特徴」と呼ぶことにする。

中間言語は目標言語に向かって発達していく動的な体系であるが、ある項目の発達が停滞し、中間言語的特徴がいつまでも残り続ける場合もある。Selinkerはこのような現象を「化石化（fossilization）」と名付けたが、近年では、「定着化（stabilization）」という術語が積極的に用いられている。定着化と化石化の違いについてLong（2003）は、両者には明確な違いは認めにくいと述べたうえで、中間言語は動的な体系であることから、定着化は化石化の前の段階であり、何らかの刺激によって変化する余地があるものであると述べている。しかし、ある中間言語的特徴が化石化したものか定着化したものかを判断するためには、長期的な調査と膨大なデータが必要となり、その判定は非常に困難を極める。本研究は、長期的な縦断調査を行うものではなく、現段階における非母語話者の言語体系の記述を行うことから、化石化という術語は採用せず、今後、何らかの刺激によって中間言語体系が変化する可能性があるという見通しのもとに、定着化という術語を使用する。その上で、現段階ではどのような中間言語的特徴が認められるか、つまり定着化して使用されているか、という立場から記述を行う。

では、なぜ中間言語的特徴が定着化するのであろうか。その背景の一つに、言語習得環境が挙げられる。言語習得環境を大別すると、語学学校やレッスンに通い、教師による明示的指導を受ける教室学習環境と、母語話者と接触する中でL2を身に着けるといふ自然習得環境の2つのパターンがある。Lightbown&Spada（2013）は、教室学習環境と自然習得環境のインターアクション場面における中間言語的特徴の扱いについて、前者では、中間言語的特徴は積極的に訂正され、正確さが優先されるのに対し、後者では、意味が通じれば中間言語的特徴には寛容であり、正確さに対する指摘はほとんど行われないと述べている。言い換えれば教室学習環境は、中間言語的特徴を定着化させないことを一つの目的とするが、自然習得環境は中間言語的特徴が定着したとしても問題として取り上げられないのである。

しかし、明示的指導や訂正行為などを適宜受ける教室学習環境であっても、中間言語的特徴は必ず出現し、残存するという事例は多く、第二言語習得研究の研究課題として取り上げられている（迫田1998、奥野2003等）。では、L2情報を聴覚インプットからしか得る機会がない自然習得者では、どのような中間言語的特徴が定着しているのか、そして、それはどのような要因によって生じるのであろうか。

そこで本研究は、自然習得者の中間言語的特徴の定着化に注目し、その中間言語体系の記述を試みる。その中でも、本稿は連体修飾表現に注目する。連体修飾表現は、「しっぽが短い犬」「グランドをととても早く走る犬」、「友達の犬」、「あの犬」のように「犬」という名詞に対して様々な情報を付加することで名詞の具体性を高めることや、指示対象を限定するものである。連体修飾には、上の例に見たように、語句によって修飾するものと、節によって修飾するものがある。本稿では、これらをまとめて連体修飾表現と呼ぶ。本稿では、中間言語が安定した段階であると考えられる、習得を始めて10年前後の自然習得者に焦点を当て、連体修飾表現における中間言語的特徴の定着に注目し、その要因と背景について考察したい。

本稿の構成は以下の通りである。§2では、調査方法の概要と分析の方法について述べる。§3では、談話データを分析し、自然習得者の連体修飾表現の運用の特徴を述べることを目的とする。その後の§4で、分析結果の考察を行う。そして、§5を本稿のまとめとする。

2. 調査の概要と分析の方法

本節では、調査の概要と、分析の方法について述べる。§2.1では、調査の概要を述べる。具体的には、インフォーマントの選定基準とインフォーマントとなる自然習得者2名と、データの比較の対象となる教室学習者2名の情報について述べたのち、調査手順と分析データについて述べる。分析の方法を述べる§2.2では、分析項目である連体修飾表現の分析の枠組みを設定し、インフォーマントの母語であるタイ語の連体修飾表現との相違点を述べる。そして、§2.3で分析の課題を述べ、§2.4で、分析の流れを述べる。

2.1. 調査の概要と分析の方法

本節では、§2.1.1で、インフォーマントの選定条件を述べ、§2.1.2でインフォーマントの情報提示する。§2.1.3で、調査方法及びデータについて述べる。

2.1.1. インフォーマントの選定

自然習得者は、その性格上、教室学習者のように学習時間や試験のレベルなどを基準とした言語能力の客観的な判断指標が設定しにくい。そのため、本研究では、言語能力以外の以下の6点をインフォーマントの選定条件として設定した。

- ① タイ語母語話者であること
- ② 日本人を配偶者としている女性であること
- ③ 配偶者やその家族、子供と同居していること

- ④ 関西地域（大阪・京都・滋賀・奈良・兵庫）に住んでいること
- ⑤ 来日時の年齢が20歳以上であったこと
- ⑥ 滞在年数が10年前後であること

①を条件とする理由は、在日タイ人にはエスニックコミュニティが認められないこと、タイ語による社会サービスも極めて少ないことによる。タイ人定住者は2015年現在で44,175人、全国の在留外国人の1.5%にあたる（法務省入国管理局2015）。現段階では、大規模なタイ人集住地域は確認されていない。また、行政や民間などの活動を見ても、中国語や韓国語、英語などでは翻訳サービスや対訳解説などがある場合が多いのに対し、タイ語による諸サービスは少ない。そのため、母語による生活支援が望めず、自助努力によって日本語社会にアクセスしていかなければいけないという言語環境があると予想される。そして②、③は、日本人と結婚している配偶者の場合、家庭という小さな日本社会に入らなければならないため、日本語習得の必要性が高いと考えられるからである。タイ人と日本人との国際結婚比率は、タイ人男性に比べ、タイ人女性の比率が10倍以上も高い（厚生労働省2015）。これらの理由から、タイ人女性を事例とする。④は、インプットに含まれる地域方言による変数を可能な限り抑えることを目的としている。⑤はL1形成が確立したと考えられる年齢に達してから日本語習得を開始したという条件を統一するためである。条件の中で特に重要になるのが、⑥の滞在年数である。滞在年数の長さと言語習得の関連性について、Stevens (1999, 2006)、Johnson & Newport (1989)、Ellis (2008)などは、滞在年数が5～10年程度の期間を経ることで安定した言語体系が習得されると指摘している。このことから10年前後の期間を経た自然習得者の中間言語体系は安定し、急速に変化することはないだろうと考えられる。中間言語的特徴の定着化の有り様を分析するためには、安定した中間言語体系を確立した段階が適切であると考え、本研究は、滞在年数が10年前後であることを条件とした。

また、本研究では、自然習得者の記述を行う上でその特徴をより明確にするために、分析の比較の材料として教室学習者も併せて調査を行った。教室学習者は、過去に継続的な日本語指導を受けた者を対象としており、それ以外の選定基準は、自然習得者と同様に①～⑥に従った。

2.1.2. インフォーマントについて

自然習得者のインフォーマントはTN¹⁾、NNの2名である（表1）。

表1 自然習得者の情報

	年齢	滞日歴	来日時の年齢	居住地	結婚年数	家族構成
TN	36歳	7年	29歳	奈良	10年	夫 義父 子供1名
NN	35歳	10年	25歳	滋賀	2年	夫 義父 義母

以下、自然習得者2名のプロフィールを簡単に述べる。TN、NNの両名とも来日時の日本語能力はゼロであり、来日後に日本語習得を開始している。TNは現在、配偶者、子供、義父と同居しており、県内にある機械部品工場で働いている。配偶者はタイ語が堪能であり、配偶者とはタイ語を使用する場合もあるものの、子供と義父に対しては日本語のみを使用している。

NNは、現在、配偶者と義理の両親と同居しており、家庭内での使用言語は日本語である。ただし、配偶者に対しては英語を使用することもある。籍を入れたのは2年前だが、交際期間は8年以上あると答えている。仕事は、大学の研究員として勤務しており、研究に関する指導やディスカッションは英語で行っている。研究室で日本語を使用するのは、個人的な付き合いのときや雑談の場面である。

次に、比較の対象となる教室学習者はWC、SCの2名である（表2）。

表2 教室学習者の情報

	年齢	滞日歴	来日時の年齢	居住地	結婚年齢	家族構成	日本語学習経歴 (内訳)
WC	31歳	7年	24歳	兵庫	7年	夫	約2年 (日本語学校)
SC	33歳	12年	21歳	大阪	7年	子供1名	約2年 (日本語学校)

以下、教室学習者2名のプロフィールを簡単に述べる。彼女らは、日本語を来日後に日本国内の大学や日本語学校等で学習した者である。WCは、結婚を機に来日した。来日直後から2年間、日本語学校に通い、上級レベルのクラスまで修了している。現在は、タイ語講師として働いている。

SCは、父親が日本人、母親がタイ人であるが、21歳で来日するまではタイにおり、日本語と接触する機会はほとんどなかった。来日後、日本語学校に約2年通い、大学の英文学科に入

学、日本人と同じ課程を修了している。現在は、日本の企業に勤めながら、タイ語の通訳やタイ語レッスンの講師などを行っている。

2.1.3. 調査方法およびデータについて

調査はインフォーマントと筆者との60分の自然談話による。談話は、①日本に来るきっかけ、②来日直後の日本での生活、③配偶者と出会ったきっかけ、④現在の生活について、⑤日本の生活で困ったことの5つの話題が中心である。談話は、これら5つの話題から脱線した場合でも、話題の軌道修正は行わない比較的自由度が高いものである。

60分の談話におけるインフォーマントの総発話数²⁾は、TN264発話、NN371発話、WC255発話、SC295発話である。延べ語数³⁾はTN1,482語(異なり388語)、NN1,161語(異なり356語)、WC1,616語(異なり381語)、SC1,898語(異なり477語)である。

2.2. 分析の枠組み：日本語とタイ語の連体修飾表現

本節では、分析の枠組みとなる日本語の連体修飾表現(§2.2.1)と、インフォーマントの母語であるタイ語の連体修飾表現(§2.2.2)について概観する。これは、日本語とタイ語の連体修飾表現の異同が非母語話者の運用に作用しているという指摘(迫田1999、奥野2001,2003等)があるからであり、本稿の分析の基礎となるものである。

2.2.1. 日本語の連体修飾表現の特徴

日本語の連体修飾表現には、動詞、イ形容詞、ナ形容詞を述語とする節が名詞を修飾するもの、名詞や副詞が名詞を修飾するもの、連体修飾専用の語である連体詞によって名詞を修飾するものがある。名詞、副詞による修飾の場合、連体助詞「ノ」が修飾部と被修飾部を結び付ける機能を果たし、名詞を修飾している。また、(7)の「ような」や「みたいな」のように助動詞の連体形を介し、名詞を修飾する場合もある。

- | | |
|---------------|-------------|
| (1) 走る犬 | 【動詞による修飾】 |
| (2) おいしい料理 | 【イ形容詞による修飾】 |
| (3) きれいな家 | 【ナ形容詞による修飾】 |
| (4) 父の車 | 【名詞による修飾】 |
| (5) 突然の雨 | 【副詞による修飾】 |
| (6) そのカメラ | 【連体詞による修飾】 |
| (7) 子供が読むような本 | 【助動詞による修飾】 |

以上が日本語の連体修飾表現の統語的特徴である。本稿では、日本語の連体修飾表現におけ

る統語的特徴の分析の枠組みとして、上記の内容を採用する。

2.2.2. タイ語の連体修飾表現の特徴

次にインフォーマントのL1であるタイ語の連体修飾表現について、ソイスダー・上田(2000)、田中(2004)、高橋(2011)によって概観する。タイ語は日本語と異なり、修飾部と被修飾部の位置が逆となり「被修飾部+修飾部」となる。例えば、(8)のように形容詞が名詞を修飾する場合は、被修飾語「花」を前におき、「きれい」が後接する形で修飾関係を示す。

- (8) dɔɔkmái sǔay (きれいな花)
花 きれい

動詞による修飾では、関係節化形式⁴⁾ thīi を挿入することで関係節となり、被修飾名詞との修飾関係が成立する。thīi は省略することもできるが、複合名詞句に限りなく近くなる(高橋2011)。

- (9) phūuyǐn thīi yuun (立っている女性)
女性 関係節化形式 立っている

名詞、副詞による修飾では、格関係を表すための前置詞 khǒɔŋ が必要となる場合がある。話し言葉では一般に省略されるが、特に【所有】や【所属】で khǒɔŋ を入れると強調の意が出る場合がある。また、(12)のように【補足関係】にある「N1 + ノ + N2」では、khǒɔŋ を省略することができず、必須要素となる(ソイスダー・上田2000)。

- (10) mɛɛ khǒɔŋ chǎn / mɛɛ chǎn (私の母)
母 前置詞 私 / 母 私

- (11) bai khǒɔŋ burii / bai burii (たばこの葉)
葉 前置詞 たばこ / 葉 たばこ

- (12) kaanrǎəmtɔn khǒɔŋ khontháŋsǒɔŋ (二人の始まり)
始まり 前置詞 二人 (ソイスダー・上田2000:8-9)

また、連体詞による修飾では、(13)のように形容詞と同じく被修飾名詞と連体詞の間には修飾関係を表す要素は入らない。

- (13) rɔtmee ní (このバス)
バス この

§ 2.2.1 と § 2.2.2 で日本語とタイ語の連体修飾表現の特徴を概観した特徴を対照し、まとめると、表3のようになる。

表3 日本語とタイ語の連体修飾表現の比較

	修飾部と被修飾部の位置	形容詞による修飾	連体詞による修飾	名詞による修飾	動詞による修飾
日本語	修飾部+被修飾部	形容詞+被修飾部	連体詞+被修飾部	名詞+ノ+被修飾部	動詞+被修飾部
タイ語	被修飾部+修飾部	被修飾部+形容詞	被修飾部+連体詞	被修飾部+khǎoŋ+ 名詞 (khǎoŋは補足関係 以外では省略)	被修飾部+関係節 化形式 thii+動詞

表3にまとめた通り、日本語は常に修飾部が被修飾部の前に位置する。タイ語は、それと異なり、被修飾部が必ず修飾部よりも前に位置する。また、タイ語の名詞による修飾では、日本語の「ノ」に相当する khǎoŋ が挿入される。しかし、日本語の場合、「ノ」は省略されないのに対し、タイ語では修飾部の名詞と被修飾部の名詞の意味関係によって khǎoŋ の挿入条件が異なり、意味的、統語的に必須要素ではない。動詞による修飾を見ると、タイ語は基本的に関係節化形式 thii を挿入し、関係節となる点で、タイ語と日本語の構造上の違いがある。

2.3. 分析の課題

大関（2008:235-236）は、日本語の連体修飾節について、英語や中国語のように修飾節であることが明示されるマーカーがないため、非母語話者には、インプットから情報を得にくく、学習者自身が連体修飾節に意識が向きにくいのではないかと述べている。そのため、第二言語習得研究において、連体修飾節は中間言語的特徴が残りやすい項目であると指摘する。

迫田（1999）は、初・中・上・超級の日本語レベルの韓国語、中国語、英語を L1 とする教室学習者各20名の発話データを分析した。その結果、出現数の増減はあるものの、初級から上級レベルでは、L1に関わらず、いずれの学習者からも「辛いノ料理」のような「ノ」の過剰使用が観察されたことを指摘している。「ノ」の過剰使用が消滅するのは、超級レベルであり、それまでは中間言語的特徴が残存し続けることが明らかになっている。また、奥野（2001）は、初級から上級レベルまでの英語、中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語母語話者計22名を対象に、来日直後と10ヶ月後に談話調査を行った。分析の結果、中国語母語話者は他の母語話者に比べ、「ノ」の過剰使用が多いこと、上級レベルの段階になって「ノ」の過剰使用が増えることが明らかになった。そして奥野（2003）では、上級レベルの英語、中国語、韓国語母語話者各10名を対象に、OPI、誤用訂正テスト、文法性判断テストの複数の調査を行った。その結果、先の奥野（2001）と同様、中国語母語話者は他の母語話者に比べ、「ノ」の過剰使用が多いことを指摘している。さらに被修飾名詞が「感じ」や「ところ」などの抽象語彙や、「ほう」「こと」などの形式名詞である場合に「ノ」と結びつきやすいことが明らかになっている。

以上のような連体修飾構造に注目した研究から、連体修飾節において上級レベルまで残存する中間言語的特徴は「ノ」の過剰使用であり、その要因には、L1の影響（特に中国語母語話者）のほかに特定の形式名詞に対して「ノ+形式名詞」という固まりを成していることが指摘されている。

これら大関（2008）や奥野（2001,2003）、迫田（1999）の研究は、連体修飾節に限定したものであり、連体修飾表現全体の記述ではない。例えば名詞による修飾に見られる「ノ」の脱落（e.g. 私の車）や「ノ」以外の助詞による連体修飾（e.g. 私が車）といった中間言語的特徴は分析対象から除外されている。先行研究で指摘されている「ノ」の過剰使用の傾向は、連体修飾節にのみに表れるものなのか、また、修飾節以外の表現にみられる中間言語的特徴の出現要因も修飾節と同じくL1の影響や固まり表現としての使用が影響しているのか明らかではない。さらに、学習環境が異なる自然習得者にも同様の傾向が認められるのであろうか、疑問点は多い。

以上の点から、本稿の分析課題を次のように上げる。

- (A) 自然習得者の連体修飾表現はどのように運用されているのか
- (B) 自然習得者の連体修飾表現の中間言語的特徴にはどのようなものが認められるか
- (C) 教室学習者と自然習得者の中間言語的特徴にはどのような異同が認められるか

2.4. 分析の対象

分析の対象は、談話データに見られた連体修飾表現であり、名詞、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、連体詞⁵⁾の修飾部によって被修飾名詞が修飾されているものを取り上げる。

分析の手順は、インフォーマント全体の傾向として、連体修飾表現の使用割合と、修飾部の品詞ごとに分類した数と割合を示していく。品詞別に傾向を見ることによって、自然習得者が使用する連体修飾表現の、連体修飾節の構造に見られる中間言語的特徴と、名詞などによる連体修飾表現に見られる中間言語的特徴が明確になると考えるからである。

なお、談話データの中には、「新しいの車」、「私のかばん」などや、「ノ」がその他の助詞によって代用されているもの（e.g. 私が友達）などの中間言語的特徴がいくつか確認される。この場合、先行文脈や被修飾名詞に対する関係性から修飾関係にあると判断できたものに限り、分析の対象とする⁶⁾。

被修飾名詞に「こと」や「の」、「ところ」をとり、節自体が名詞となることで述語に対する補語の役割を果たす補足節や、「わけ」「とき」などの形式名詞を被修飾部とする修飾表現も本研究の対象とする。「という」や「ような」などが連体修飾の接続形式として挿入されている発話も対象とする。この場合、それぞれの連体形から、動詞、ナ形容詞として分類する。

3. 分析

本節では、談話データに見られる連体修飾表現の分析を行う。まず § 3.1 で、連体修飾表現の全体的な傾向を見る。そして、§ 3.2 では、談話に認められた教室学習者と自然習得者の中間言語的特徴の分析を行う。そして § 3.3 を分析のまとめとする。

分析では、自然習得者の特徴をより明確にするために、比較の対象となる教室学習者の分析結果を先に提示する。

3.1. 全体的な傾向

表 4 は、教室学習者の連体修飾表現の使用数とその割合、そして 1 発話における連体修飾表現の平均をまとめたものである。1 発話に含まれる連体修飾表現の平均は、§ 2.1.3 の総発話数に対して連体修飾表現の平均数を示したものである。表 4 を見ると、個人によって使用傾向は異なるものの、品詞別の使用割合はおおよそ似通っており、特に名詞、動詞を修飾部にとるものが多く使用されていることがわかる。また、両インフォーマントとも 1 発話内における連体修飾表現の平均は 0.5 以上であった。

表 4 教室学習者の連体修飾表現の使用数と割合

	名詞	動詞	イ形容詞	ナ形容詞	副詞	連体詞	合計	1 発話における平均
WC	50	46	17	5	7	22	147	0.58
	34.0 %	31.3 %	11.6 %	3.4 %	4.8 %	15.0 %	100 %	
SC	61	51	8	6	3	24	153	0.52
	39.9 %	33.3 %	5.2 %	3.9 %	2.0 %	15.7 %	100 %	

次に自然習得者の結果である。表 5 を見ると、教室学習者に比べ、自然習得者は名詞による連体修飾表現の割合が最も高く、動詞による連体修飾表現の使用は少ないことがわかる。特に NN では動詞を修飾部にとる表現は 1 例も認められなかった。

表 5 自然習得者の連体修飾表現の使用数と割合

	名詞	動詞	イ形容詞	ナ形容詞	副詞	連体詞	合計	1 発話における平均
TN	50	13	14	2	3	18	100	0.38
	50.0 %	13.0 %	14.0 %	2.0 %	3.0 %	18.0 %	100 %	
NN	35	0	4	2	3	9	53	0.20
	66.0 %	0.0 %	7.5 %	3.8 %	5.7 %	17.0 %	100 %	

さらに、自然習得者の1発話に含まれる連体修飾表現の平均は、0.38と0.2にとどまっており、教室学習者に比べ、低い頻度でしか用いられないこと、さらに連体詞による修飾は、教室学習者よりも使用割合が若干高いことが指摘できる。表4、5で明らかになった教室学習者と自然習得者の連体修飾表現の使用頻度の違いについては、§4の考察の節で検討したい。

3.2. 中間言語的特徴について

次に、中間言語的特徴の使用に注目する。表6は、修飾部の品詞ごとに発話に表れた形式とその数をまとめたものである。発話形式は、母語話者と同じ統語規則で運用されているものを上に、中間言語的特徴がある形式を下に列挙する形で示している。また、網掛がある行は、中間言語的特徴を持つ連体修飾構造であることを示している。

本節では表6に示されている教室学習者と自然習得者の中間言語的特徴について、発話例を提示しながら整理する。

表6 品詞ごとの発話形式の使用数

修飾部の名詞	発話形式	教室学習者		自然習得者	
		WC	SC	TN	NN
名詞	N1 + の + N2	50	61	40	20
	N1 + \emptyset + N2	—	—	6	3
	N1 + に + N2	—	—	4	—
	N1 + が + N2	—	—	—	12
動詞	動詞 + N	44	50	10	—
	動詞 + の + N	4	1	3	—
イ形容詞	イ形容詞 + N	15	7	5	4
	イ形容詞 + の + N	2	1	9	—
ナ形容詞	ナ形容詞 + N	5	6	2	2
副詞	副詞 + の + N	7	3	3	3
連体詞	連体詞 + N	22	24	18	9

3.2.1. 教室学習者の傾向

表6から、教室学習者の連体修飾表現について、以下の点が指摘できる。

- ・修飾部が名詞、ナ形容詞、副詞、連体詞の連体修飾表現は、母語話者と同じ統語規則で運用されている。
- ・修飾部が動詞とイ形容詞である連体修飾表現に、連体助詞「ノ」の過剰使用が認められる。

教室学習者の結果を見ると、動詞とイ形容詞に「ノ」の過剰使用が数例認められる。WCの発話に見られる「ノ」の過剰使用例は(14)、(15)のようなものである。

(14) 229WC 話しかけ、前行ったときに話しかけたらめんどくさいノ感じますね。

(15) 312WC チェンマイ、チェンライ語と全然違うノ言葉も少しずつわかってきたんですけど、テレビを見たらもうわかるかな。

WCに「ノ」の過剰使用がある発話の被修飾名詞を見ると、「感じ」が3例、「言葉」「町」が1例ずつである。(14)の被修飾名詞「感じ」について、奥野(2005)は、「ノ」が付随しやすい傾向にある抽象的な名詞であると指摘しており、先行研究との傾向の一致が伺える。

SCの「ノ」の過剰使用の数は少なく、(16)の動詞、(17)のイ形容詞による2例である。

(16) 164SC ううん、結婚したノあと。

(17) 568SC だからなんか、なんかなんやろ??、安いノ学校は行けないと思ってしまう。

被修飾部を見ると「あと」と「学校」である。SCの他の発話を見ると「仕事終わったあと」、「汚い学校」という修飾部の品詞も同一のものが用いられており、同一被修飾部でも「ノ」の過剰使用が出ない発話があり、「ゆれ」があることがわかる。

3.2.2. 自然習得者の傾向

自然習得者は、ナ形容詞、副詞、連体詞では母語話者と同じ統語規則で運用されているが、名詞による連体修飾表現には、次のような中間言語的特徴がある。

- ・「ノ」の脱落が認められる。
- ・TNは「ニ」、NNは「ガ」が、「ノ」に当たる連体助詞として使用されている。

これらは教室学習者には見られない特徴である。

まず、「ノ」の脱落現象について例を挙げて見ていくことにする。TNの「ノ」の脱落は(18)、(19)のような例である。

(18) 442TN 自分の家族 ほうがいい思った。

(19) 76TN 会社、日本 会社辞めて、【子供名】、このとき【子供名】3歳かな。

TNの「ノ」の脱落が起こるときの被修飾名詞を見ると、「ほう」が3例、「とき」が2例、そして「会社」が1例であった。TNの「ほう」は、全て名詞による連体修飾に現れ、7例中3例が「ノ」を落とした形で使用されている。一方、「とき」を被修飾名詞にとる場合は、動詞による連体修飾が7例、連体詞による修飾が4例、イ形容詞による修飾が2例、名詞による修飾が5例であった。名詞による修飾の5例中2例が「ノ」を落とした形で使用されている。TNの「とき」「ほう」を見ると、どの品詞においても「ノ」の過剰使用は1例も認められなかった。従って、TNの「とき」「ほう」については、迫田(1999)、奥野(2005)が指摘する「ノとき」「ノ

ほう」という固まりで処理するストラテジーとは異なっていることが指摘できる。

次にNNの例を見る。NNの「ノ」の脱落は(20)～(22)の3例である。

(20) 76NN タイ人が大体18人、【大学名】が全部、大学がタイφ学生が14人。

(21) 562NN わたし、タイφ学校ですね。

(22) 516NN わたしが東京が行って友達が“あなたの日本語がちょっと面白いなー”とか、おばあさんとか、“関西φ人(ひと)ですね”とか。

被修飾名詞を見ると、形式名詞ではなく具象名詞の「学生」「学校」「人」である。NNにはTNのような「ノ」の脱落は認められなかったことから、個人による傾向の差があることが指摘できる。

次に、自然習得者の「N1 + ノ + N2」では、連体助詞「ノ」に代わり他の助詞が使用されている例がいくつか認められた。助詞の形式は個人によって異なり、TNでは(23)のように「ニ」が、NNでは(24)のように「ガ」が連体助詞「ノ」に代わって用いられている。

(23) 141TN この日本に来て2年ぐらいに日本語ニ試験1回にやってできないね。

(24) 349NN 旦那さんガお母さんお父さんも、なんですかね??、“いつが、あか、あか、子供がいつかなー?”とか、でも旦那さんが“これはわたし達、わたし達ガPlanです”。

このような例は、教室学習者のデータには1例もなく、先行研究でもほとんど取り上げられていない。TNの「ニ」は、データの中で4例出現しており、(23)以外にも、「先生ニ勉強」「タイニ生活」「こっちニ上」という発話が認められた。「ニ」が出現する発話の修飾名詞や被修飾名詞を見ると、特定の傾向があるとは判断できない。一方、NNの「ガ」は、データの中に12例認められるが、その中でも(24)のように修飾名詞が「旦那さん」や「私達」などの人物名詞がくる例が7例あり、「人物名詞+ガ」で使用されやすい傾向にある。これは、助詞「ガ」が主体をマークし、動作主との結びつきが強いことが影響しているのではないかと考える。以上の点から、TNは「ニ」、NNは「ガ」とそれぞれで形式が異なるが、自然習得者の構造的特徴の一つとして、本来の「ニ」「ガ」が担わない連体助詞の役割まで、使用範囲を拡大していることが指摘できる。

一方、動詞、イ形容詞による連体修飾表現については、自然習得者のみに見られる中間言語的な特徴はなく、TNに、教室学習者にも見出された「ノ」の過剰使用が観察された。

(25) 389TN だけど細かいノやつ作ります。

(26) 336TN 今、どこ行きたいノところも自分行くできるしだから、しあ、幸せかな。

TNの「ノ」の過剰使用例の被修飾名詞は、12例のうち「やつ」が4例、「ところ」が2例、「人」が2例、「家族」が2例、「前」「我慢」が1例ずつであった。この結果は、形式名詞であ

る「やつ」や「ところ」は「ノ」が結びついて処理される傾向にあるという奥野（2005）、迫田（1999）の指摘と同じ結果である。また、数は少ないものの「家族」「前」「我慢」でも「ノ」の過剰使用が認められることから、形式名詞を被修飾部にとる以外の環境でも、「ノ」の過剰使用が出現することが指摘できる。

3.3. 分析のまとめ

本節で明らかになった点を、§ 2.2.3で挙げた分析課題A～Cと対応させてまとめてみよう。

(A) 自然習得者の連体修飾表現はどのように運用されているのか

(B) 自然習得者の連体修飾表現の中間言語的特徴にはどのようなものが認められるか

(C) 教室学習者と自然習得者の中間言語的特徴にはどのような異同が認められるか

教室学習者と自然習得者の結果を、分析課題とあわせて示すと表7のようになる。

表7 分析結果まとめ

	教室学習者	自然習得者
全体的傾向	①1 発話あたりの平均が0.5～0.7と自然習得者よりも使用頻度が高い… (A) ②名詞、動詞による修飾表現の使用割合が高い… (A)	⑤1 発話あたりの平均が0.2～0.3と教室学習者よりも使用頻度が低い… (A) ⑥動詞による修飾表現の使用が少ない… (A)
構造的傾向	③名詞、ナ形容詞、副詞、連体詞は母語話者と同じ統語規則で運用… (A) ④連体格助詞「ノ」の過剰使用… (B)	⑦名詞、ナ形容詞、副詞、連体詞は母語話者と同じ統語規則で運用… (A) ⑧連体格助詞「ノ」の脱落… (B) ⑨他の格助詞による「ノ」の代用… (B) ⑩ (TN) 連体格助詞「ノ」の過剰使用… (B)

↑—————↑
… (C)

では、なぜ表7のような結果が生じたのだろうか。次節では、表7にまとめた自然習得者の連体修飾表現の運用の特徴について考察を加えることにする。

4. 考察

本節では、分析結果の考察を行う。§ 4.1では、自然習得者の連体修飾表現の運用メカニズムに注目し、考察を行う。これは課題 (A) とその結果に関する考察である。§ 4.2では、自然習

得者の連体修飾表現に見られる中間言語的特徴について考察する。これは課題（B）とその結果に関する考察である。§4.3では、自然習得者と教室学習者の中間言語の異同について考察する。これは課題（C）とその結果に関する考察である。なお、以下、本文中の①、②等の数字は、表7のものである。

4.1. 自然習得者の連体修飾表現の運用メカニズム

自然習得者の連体修飾表現の全体的な特徴は、⑤1発話あたりの連体修飾表現の平均が少ないこと、そして⑥教室学習者よりも動詞による修飾が少ないことが挙げられる。そのことから自然習得者は連体修飾表現を回避しているのではないかと考えられる。まず、自然習得者に連体修飾表現数が少ないのはなぜかという点について考察する。

以下の(27)のTNの発話例をみてみよう。

(27) 61TN でも今仕事してないから最近もったいない思った。

62TN 今もこの失敗。

TNの発話には「この」を使用し、先行発話の内容を引き継ぐような発話がいくつか認められる。(27)の「この失敗」は「タイで教員免許を取ったが、教師にはならなかった」ことを指す。62TNの発話だけでは「失敗」の情報が不足しているが、「この」を置くことで、直前の発話の情報を「失敗」に付加することに成功している。また、指示詞を用いて、先行発話の情報を次の発話に付加するという方法は、TNだけではなくNNの発話でも認められる。

(28) 228JS タイの人は、式、結婚式のまえに撮る写真が大切なんですよ。(中略)

234NN For example えっと、例えばは、この写真は、なんですかね??、traditional ですか?? (JS:はいはい) が好きです。

(28)では、結婚式前に写真を撮るという話題が展開しており、234NNの「この写真」は、先行する228JSの発話にある「結婚式のまえに撮る写真」を指し示していることがわかる。

また、連体詞を見るとすべてコ系（この、こんな）であり、自然習得者にはソ系やア系は使用されていなかった。さらに連体詞ではないが、「これ」が被修飾名詞と結びついて、先行発話の情報を付加している例がいくつかあった。例えば(29)のような発話である。

(29) 311NN わたしが、わたしのお母さんと、えっと、お父さんのお母さんがも一緒に住みます、住みましたでした。

312NN だからわたしこれが普通みたい。

312NNの「これ」の指示対象は、先行発話311NNの「お父さんのお母さん（＝義理の母）も一緒に住むこと」である。「これ」によって先行発話の情報が差し示されることで312NNの発話では、「義理の母も一緒に住むこと」という情報が付加されることとなり、聞き手にも共

有される。つまり、NNは先行発話の情報を「これ」で指示し、次に続く発話に情報を付加していることがわかる。また、§3.1の表5を見ると、連体詞の使用は教室学習者に比べ、自然習得者の方が若干高い頻度で使用されている。このことから、自然習得者は連体詞のコ系指示詞に、連体修飾表現に相当する機能を担わせていることが指摘できる。

では、教室学習者の傾向はどうであろうか。教室学習者の傾向を見ると、連体詞による修飾は、WCが15%、SCが15.7%と若干自然習得者よりも使用割合が低いことが指摘できる。また、教室学習者には、コ系だけではなく、(30)、(31)のようにソ系、ア系も使用されていることが談話データからわかった。

(30) 98WC あの一前、どうして1年半帰らなかったかという、その前は1年に帰ったんです。

(31) 22SC あれあれ、あの一、日清のトムヤムクン。

23JS そうです。

24SC あのトムヤムはおいしかったよね。

教室学習者の結果と比較すると、コ系指示詞の文脈指示用法を用い、名詞の具体性を高めるという方法は、やはり自然習得者の特徴と言えるだろう。では、なぜ、自然習得者はコ系指示詞による情報付加という方法を取り入れているのであろうか。

コ系指示詞を使用する背景には、連体修飾を作る言語処理のプロセスを減らすことができるということがあると考えられる。連体修飾表現を作るためには、修飾部にくる品詞判断を行う必要がある。名詞、副詞であれば「ノ」が必須となり、ナ形容詞では連体形に変換しなければならない。動詞、イ形容詞は終止形で接続させなければならない、修飾部の品詞によって被修飾部との接続方法が異なる。このような統語処理を行うには、非常に高度な言語処理を行わなければならない。しかし、指示詞によって文脈上の修飾部分を指し示すことで、修飾成分の品詞判断をする必要がなくなり、統語処理の負担を軽減することができる。また、コ系で直前の情報を指示することで、聞き手とも新しい情報を共有することができ、情報の不足や伝達の失敗を減らすことにもなる。つまり、コ系指示詞を連体修飾表現の方法の一つとして取り入れることで、経済性が高まり、コミュニケーションにおける伝達の正確性を高くすることができると思われる。

次に、自然習得者に動詞による修飾が極めて少ない点については、大関(2008)が指摘するように、インプットにある連体修飾に対する気づきの問題が影響していると考えられる。日本語の連体修飾節はタイ語のように修飾節であることをマークする形式がないため、被修飾名詞と修飾節の関係を理解し、分析する統語的、形態的の手がかりがなく、インプットに含まれるこの表現が連体修飾節であるという証拠が得にくい。さらに、日本語の連体修飾節には、「動詞+名

詞」という語順によって表されるが、会話場面では、その語順が崩れたとしても意味の伝達には大きな支障は生じないという状況もある。例えば、「昨日買った靴、どこに置いたの?」という発話文があったとする。それを「どこに置いたの?靴!昨日買った!」と発話したとしても、聞き手には発話意図が十分伝達可能である。タイ語では、関係節化形式を手がかりに、連体修飾節を判断していたが、日本語の場合は語順に則って判断しなければならない。つまり、自然習得者にとって、聴覚インプットから連体修飾節に気づくことは容易ではなく、帰納的に分析、定着させることが難しいのだと言える。また、コミュニケーション場面では、語順が入れ替わったとしても意味の伝達には大きな支障にはならないこと、コ系指示詞を使用して情報が付加できることから、動詞による連体修飾節の使用数が極めて少ないのだと考える。

4.2. 連体修飾表現に見られる中間言語的特徴

次に、自然習得者に見られる個々の中間言語的特徴について考察する。自然習得者の中間言語的特徴には⑧「ノ」の脱落、⑨他の助詞による「ノ」の代用が認められる。これらの中間言語的特徴がどのような要因で現れ、何故定着したのか、以下の小節で考察を加える。

4.2.1. ⑧「ノ」の脱落

まず、「ノ」の脱落について考察する。「ノ」が脱落した連体修飾表現の被修飾部を、形式名詞のものと同義名詞のものに分ける。(32)、(33)は形式名詞を修飾部にとる例である。

(32) 91TN わたしも3級のテストのときにいつも漢字におとした。

(33) 442TN 自分の家族のほうがいい思った。

TNでは「とき」が2例、「ほう」が3例で「ノ」の脱落が生じる。迫田(1999)では学習者は「ノほう」というユニットを、奥野(2005)では、「ノとき」という固まりで処理することで、「ノ」の過剰使用の要因となると指摘するが、TNの場合「ノ」が脱落するという逆の傾向が明らかになった。この点について、L1の面から考察したい。時間を表す「N1+ノ+とき」、比較をあらわす「N1+ノ+ほう」をタイ語で見ると、「子供のとき」*toon chǎn pen dèk* (とき/私/コピュラ/子供)、「タイのほうがいい」*thay dii kwàa* (タイ/いい/ほう)となる。タイ語の場合、被修飾名詞を修飾する句は日本語のように名詞句ではないため、「ノ」に相当する前置詞 *khǎoŋ* は使用されない。つまり、「ほう」「とき」では、日本語の構造のような「名詞+ノ+名詞」ではないことから、「ノ」を使用しないという言語知識が働き、結果として「ノ」が脱落したのではないかと考える。ただし、TNの発話では、「N1+φ+とき」が2例に対し、「四年生のとき」のように「N1+ノ+とき」が4例あった。また、「N1+φ+ほう」が3例に対し、「山のほう」のように「N1+ノ+ほう」が2例認められた。このように必ずしも「ノ」が

脱落して使用されているわけではないことから、「ノ」の脱落には「ゆれ」があると考えられる。

もう一つ、具象名詞を被修飾部にとる場合に見られる「ノ」の脱落の例を見てみる。

(34) 76TN 会社、日本の会社辞めて、【子供名】、このとき【子供名】3歳かな。

(35) 562NN わたし、タイの学校ですね。

(36) 516NN わたしが東京が行って友達が“あなたの日本語がちょっと面白いなー”とか、おばあさんとか、“関西の人（ひと）ですね”とか。

「日本の会社」や「タイの学校」「関西の人」という場合、日本語では「ノ」を挿入しなければ修飾関係にはならないが、タイ語では「ノ」に相当する前置詞 *khǎw* は必須要素ではない。

また、修飾部の名詞を見ると「タイ」「日本」「関西」と国名、地域名が使用されている。地域名は「タイ料理」「日本家屋」「関西文化」のように、複合名詞として定着しやすく、様々な名詞と結びつけることが可能である。タイ語において「ノ」相当の前置詞 *khǎw* が不要なこと、そして地域名の名詞に対しては、複合名詞の造語力が強く多様なインプットがあることから、自然習得者に「ノ」の脱落が見られたと考える。

ここで、上で整理したことを、白畑・久野（2005）の発達段階と照らし合わせてみよう。白畑・久野（2005）は「ノ」の脱落について、自然習得環境で日本語を習得した児童の発話データを分析したものである。白畑・久野（2005）は、「N1 + ノ + N2」の発達段階について、3つの発達段階があると指摘する。第一段階では「N1 + φ + N2」という「ノ」が脱落して使用される段階、第二段階では「N1 + ノ + N2」が出現するが、「N1 + φ + N2」の特徴と混在する状態である。第三段階では「N1 + ノ + N2」に安定していくことがわかっている。仮に、このプロセスが成人の自然習得者にも当てはまるのであれば、「ノ」の脱落は習得初期の段階から残存している特徴だと考えられる。このことから名詞による連体修飾の使用傾向を見ると、自然習得者の連体修飾表現の段階は、「N1 + ノ + N2」が使用されている第三段階にあると言えるが、一部の条件においては習得初期の特徴が残った第二段階にとどまっている状態であると考えられる。

習得の初期段階では、L2の言語知識が不足しているため、L1の統語規則をL2に転移させて運用する傾向があると言われている（Chan2004）。これらの結果を踏まえると、自然習得者は習得初期の段階でL1を直訳する形で作っていた中間言語的特徴が定着したのだと考えられる。

4.2.2. ⑨他の助詞による「ノ」の代用

次に、他の助詞による「ノ」の代用である。TNは「ニ」、NNは「ガ」を連体助詞「ノ」の代用形式として使用している。では、なぜ「ニ」と「ガ」が連体助詞相当の働きをするのか、

TNとNNの助詞の傾向から考察したい。TNとNNの談話データに見られた助詞の使用数とその割合を見ると、表8のようになる。

表8 自然習得者の助詞の使用数とその割合

		ガ	ヲ	ニ	ヘ	デ	カラ	ヨリ	マデ	ト	φ	合計
TN	使用数	9	0	77	0	5	1	0	1	0	70	163
	割合	5.5%	0%	47.2%	0%	3.1%	0.6%	0%	0.6%	0%	42.9%	100%
NN	使用数	235	0	0	0	3	2	0	2	0	17	259
	割合	90.7%	0%	0%	0%	1.2%	0.8%	0%	0.8%	0%	6.6%	100%

表8の「φ」は、助詞が入りうる箇所に助詞の形式が認められなかったゼロ助詞を表している。表8から分かる通り、TNは「ニ」、NNは「ガ」に著しい偏りがある。また、用法によって助詞の使い分けはあまり行われない。TNの「ニ」とNNの「ガ」は、母語話者の「ニ」「ガ」の用法範囲よりも、より広範囲に使用されており、「ニ」「ガ」をどの用法にも適用できる幅広い助詞として使用されていることがわかる。つまり、TNの「ニ」とNNの「ガ」は、母語話者に比べ名詞と述語の意味関係を表すという働きが弱く、意味関係に基づいて助詞が選択、運用されていないと言える。

他の助詞による「ノ」の代用について白畑・久野（2005）や久野（2009）は、助詞の中で早く定着し、使用できるようになったものが「ノ」の代用形式として使用されるのではないかと述べている。さらに、その他の助詞が連体助詞として使用される中間言語的特徴が出現する時期は一時的であり、徐々に連体助詞は「ノ」に統一されていくことも明らかにしている。TNとNNのデータを見ると、「N1 + ノ + N2」を基本構造とし、所々に「ニ」、「ガ」の助詞が「ノ」の代用形式として使用される。TNの「ニ」が出現する条件は特定できないが、NNの「ガ」を見ると、§3.2.2でも述べたように、人物名詞と「ガ」が結びつきやすい傾向が指摘できる。この「ガ」と人物名詞の結びつきが要因となり、「人物名詞 + ガ + N2」となったのではないかと考えられる。つまり、連体助詞「ノ」の代用としてその他の助詞が使用される背景には、習得した助詞の意味機能が十分に分析されておらず、使用範囲があいまいであることにより、本来「ノ」が担うべき連体助詞の範囲にも、インフォーマントにとって最も使用しやすい助詞が採用されるのではないかと考えられる。そして、その不安定な体系が徐々に定着した結果、TNに「N1 + ニ + N2」、NNに「N1 + ガ + N2」という中間言語的特徴が根強く使用されるのだと考えられる。

4.3. 自然習得者と教室学習者の中間言語の異同

次に、教室学習者と自然習得者の異同について考察する。自然習得者の連体修飾表現の運用は、教室学習者同様、その多くが母語話者と同じ体系で運用されていることが指摘できるものの、いくつかの中間言語的特徴の定着も認められる。これまでの分析で指摘したように、自然習得者には、連体修飾表現の回避、「ノ」の脱落、他の格助詞による「ノ」の代用、コ系指示詞による情報の付加が挙げられるのに対し、教室学習者には、「ノ」の過剰使用が中間言語的特徴として挙げられるのみである。

まず、④教室学習者および⑩自然習得者の両者に見られた「ノ」の過剰使用は、どの母語話者であっても必ず出現する中間言語的特徴である。奥野（2005）は、「ノ」の過剰使用が定着する背景には、ナ形容詞と名詞の混同、L1の転移、特定の名詞と結びついた言語処理のストラテジーなど複合的な要因が関与していると指摘している。さらに、「ノ」の過剰使用が高いレベルまで残る背景について、「ノ」を付加した形での自動処理を挙げている。自動処理とは、習慣が自動化され、注意を払う必要がない無意識的な処理のことである。「ノところ」や「ノ感じ」などの形が無意識レベルに定着してしまい、「面白いノところ」に見られる「ノ」に意識が向かず、モニターできなくなってしまうからであると指摘している。「ノ」の過剰使用が中間言語的特徴であるとモニターできない背景には、「ノ」は連体修飾を表すマーカであるという規則が認知、定着することによって「面白いノところ」の「ノ」が過剰な要素であるという意識が向きにくくなるのではないかと考える。この「ノ」の過剰使用は、どのような言語刺激を受けても、気づきにくく、修正ができない特徴であると考えられ、「ノ」の脱落や他の助詞による代用などの中間言語的特徴とは性格が異なるものである。本稿のデータを見ても、上級レベルを修了し、さらに10年近く日本語のインプットを受け続ける環境にある教室学習者にも、「ノ」の過剰使用が定着していることが指摘でき、普遍的に表れ、定着しやすい中間言語的特徴であると言える。

次に、⑧「ノ」の脱落、⑨他の格助詞による「ノ」の代用といった中間言語的特徴が自然習得者のみに見られ、教室学習者に認められなかったのはなぜかについて考察する。自然習得者に見られる「ノ」の脱落や他の助詞による代用などは、教室学習環境であれば何らかのフィードバックを受け、修正される箇所である。あるいは導入や指導において、「N1 + ノ + N2」であり、「N1 + φ + N2」や「N1 + 他の助詞 + N2」という表現は、「間違った表現である」と明示的に示された可能性もある。教室学習者の場合、習得初期に表れる中間言語的特徴は、定着する前に適宜指導、修正を受けるため、定着化することはなく、早い段階で出現しなくなる。しかし、自然習得者の場合、聞き手から訂正行為はほとんど行われないため、習得の初期段階に表れる中間言語的特徴が定着し、連体修飾表現の一つのバリエーションとなっていると言え

る。

最後に、自然習得者のコ系指示詞による運用について述べる。自然習得者がコ系指示詞を頻用し、名詞にさまざまな情報を付加する方略を取っているのに対し、教室学習者の場合、そのような傾向は顕著に表れるということはない。これは、自然習得者は、コ系指示詞を使用することで統語処理の複雑な工程を省き、伝達ミスを犯すリスクを軽減させようとしているからだと考えられる。それに対し、教室学習者は、指示詞だけではなく連体修飾表現も適宜使用している。教室学習者は、長期間にわたる指導を受け、ドリル練習や変換練習、作文に対する添削などあらゆる方法によって連体修飾表現の統語処理が自動化され、統語処理のスピードが上がっており、自然習得者のようにコ系指示詞を使用して、コミュニケーションの正確性を高める必要はないと考えられる。

以上の点から、教室学習者と自然習得者の相違点を生み出す背景には、習得初期における中間言語的特徴の定着の有無が影響していること、そして統語処理の自動化の速度と正確さの差が、コ系指示詞による運用の違いの要因となっていると指摘できる。

5. まとめと今後の課題

以上、§4の考察で明らかになった点から、自然習得者の連体修飾表現の特徴をまとめると、以下ようになる。

- a) 自然習得者は、連体修飾表現の使用が教室学習者に比べ少ない。これは、コ系指示詞を用いた情報付加によって、連体修飾表現を回避していることが要因として考えられる。
- b) 動詞による連体修飾節の使用が極めて少ない。日本語の連体修飾節はインプットにおいて形式的な手掛かりがないため、連体修飾節の言語体系に気づかず、分析ができないため習得、使用が少ないのだと考える。
- c) 中間言語的特徴の定着では、「ノ」の脱落、他の助詞による「ノ」の代用、「ノ」の過剰使用が認められる。これらの特徴は習得初期から出現しているものであると考えられ、それらが訂正されることなく、定着して使用されていると指摘できる。

また、自然習得者の連体修飾表現に見られる中間言語的特徴は、教室学習者に比べ、バリエーションが多いということも明らかになった。これは、教室学習者が適宜、教師などによって中間言語的特徴を訂正され、指導を受けていたのに対し、自然習得者はそのような訂正行為を母語話者などから受ける機会がほとんどなかったことによると言える。また、他の助詞による「ノ」の代用などでは、インプットを中心とした助詞の情報分析は非常に難しいため、助詞の意味的分析の細分化ができず、助詞の情報が不透明になってしまう。助詞の分析が不透明で

あるがゆえに、本来は格助詞が担わない連体助詞の用法にまで使用範囲を拡大していると考えられる。言語体系の分析の不透明さが解消されないことに加え、自身の言語使用に対する母語話者などからの否定的反応があまり表面化しないことも中間言語的特徴の定着化の誘因となっていると考える。しかし、そのような言語環境にある自然習得者であっても、連体修飾表現の多くは、母語話者と同じ言語体系で運用されており、中間言語的特徴が定着している表現はごく一部であることも明らかになった。また、自然習得者の連体修飾表現には、分析で明らかになった通り、母語話者とも教室学習者とも異なる特徴が認められるものの、それらによってコミュニケーションが破たんするという事はなかった。それは、自然習得者が自然習得環境で得た日本語体系を上手くコミュニケーションツールとして使いこなしているという証であるだけでなく、一つの言語資源として確立したものであるからだろう。

一方、今後の自然習得者が使用する言語をめぐる分析の課題には、大きく2つある。

まず一つは自然習得者の連体修飾表現をより複合的な視点から分析することである。分析から、自然習得者の連体修飾表現の運用には、指示詞や助詞が大きくかかわっていることが明らかになった。今後、コ系を含む指示詞全体の運用や、助詞の運用など連体修飾表現以外の言語項目の分析を合わせ、多角的に取り組む必要がある。さらに分析を進め、自然習得者の中間言語体系を複合的な分析を通して明らかにしたい。

もう一点は、自然習得者の言語環境や母語話者との接触頻度や内容を踏まえた分析を行うことである。本稿が対象としたTNとNNは、日本人を配偶者に持ち、恒常的に日本語を使用する環境にある。TNとNNは日本語が全く分からない状態で来日し、習得を開始しているが、来日当初のコミュニケーションは日本語ではなく、英語またはタイ語で行われていた。しかし、自然習得者の中には、日本語以外の言語が使用できず、日本語を使用せざるを得ない環境しかなかった者もいると考えられる。TN、NNともに現在では日常生活では日本語を使う機会が圧倒的に多いと述べているが、来日直後の言語環境を含め、言語生活環境の差が運用面でどのように影響するのか、考察する必要がある。

大きく上記の2点を今後の課題とし、自然習得者が使用する言語の記述を進めていく。

注

- 1) インフォーマントIDは、インフォーマントの頭文字に、自然習得者はNaturalの[N]、教室学習者はClassroomの[C]をあわせて示したものである。対話者を示す場合は[JS]とする。さらに談話例を示す場合には、[123NN]のようにして談話の通し番号とIDをあわせて示す。
- 2) 1発話の認定基準は宇佐美(2011)に従う。1発話の認定基準は以下の4点である。
 - ①ひとりの話者による「文」を成していると捉えられるもの。
 - ②1語文や、述部が省略されているもの、最後まで言い切られない発話は話者交替や間などを考慮し判断す

- る。
- ③途中に挿入される形で相手の発話が始まり、結果的に話者の発話が終了した発話や、その後に間があった場合「1発話文」として認める。
- ④フィラー、直接引用など、語と語のあいだに間がない場合は、先行部・後続部とまとめる。
また、文字化資料の凡例は以下の通りである。
発話文終了：。、疑問文：？、半疑問文：??、直接引用部：" "、短い相づち：()
- 3) 延べ語数は、KH Coderの解析結果を元に、誤解析の部分を修正して集計した。
- 4) 用語は高橋（2011）に倣う。
- 5) 本研究では鈴木（1984）、田村（2008）を参照し、以下のものを連体詞とした。
この／その／あの／どの／ほんの／とうの／じつの／こんな／そんな／あんな／ある／大きな
小さな／わずかな／いろんな／とある／さる／いわゆる／たいした／とんだ／だいそれた
- 6) 分析の対象から除外したものは以下のような例である。
- ① 底となる名詞が認められないもの（e.g. 日本来たφがお父さんだけ）
 - ② 修飾部の活用の問題により、修飾節とは判断しにくいもの（e.g. 勉強したらほうがいいかな思ってた）
 - ③ 日本語以外による修飾節（e.g. International 研究）
 - ④ 格関係にあるか修飾関係にあるか判断が難しいもの
（e.g. 大学φ勉強終わって→大学デ勉強終わって／大学ノ勉強終わって）
 - ⑤ 日本語の複合名詞句として一般的に定着しているもの（e.g. 駅構内）

参考文献

- 宇佐美まゆみ（2011）『基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2011年版』『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金 基盤研究B（2）（研究代表者：宇佐美まゆみ）研究成果報告書。
- 大関浩美（2008）『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版。
- 奥野由紀子（2001）『日本語学習者の「の」の過剰使用の要因に関する考察—縦断的な発話調査に基づいて—』『広島大学大学院教育学研究科紀要』（50），pp.187-195。
- （2003）『上級日本語学習者における言語転移の可能性—「の」の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて—』『日本語教育』（116），pp.79-88。
- （2005）『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』風間書房。
- 久野美津子（2009）『ヒンディー語母語話者による日本語名詞句構造習得に関する予備的調査—格助詞「の」を中心に—』『静岡大学国際交流センター紀要』（3），pp. 43-59。
- 迫田久美子（1998）『中間言語研究—本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得—』溪水社。
- （1999）『第二言語学習者による「の」の付加に関する誤用』『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成8年度～10年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 白畑知彦・久野美津子（2005）『L2児童による日本語名詞句構造内での『ノ』の習得』*Second Language*（4），pp.29-50。
- 鈴木英夫（1984）『連体詞の諸問題—研究史的視点を含む—』『研究資料日本文法 第4巻 修飾句・独立句編 副

- 詞・連体詞・接続詞・感動詞』 pp.81-12, 明治書院.
- ソイスダー・ナラノーン・上田広美 (2000) 「タイ人日本語学習者による誤用—「の」と「khong」との比較—」
『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築研究成果報告書』 pp.132-143.
- 高橋清子 (2011) 「タイ語の関係節構文」長谷川信子編『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』 pp.253-275, 開拓社.
- 田中寛 (2004) 『統語構造を中心とする日本語とタイ語の対照研究』 ひつじ書房.
- 田村泰夫 (2008) 「常用辞書における連体詞の認定について」『広島大学留学生教育』 (12), pp.43-50.
- Chan, Y. W. (2004). Syntactic transfer: evidence from the interlanguage of Hong Kong Chinese ESL learners. *The Modern Language Journal*, 88(1), pp. 56-74.
- Ellis, R. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.
- Johnson, J. S. & Newport, E. L. (1989). Critical period effects in second language learning: the influence of maturational state on the acquisition of English as a second language. *Cognitive Psychology*, 21 (1), pp.60-99.
- Lightbown, P. M., & Spada, N. (2013). *How languages are learned* (4th ed.). Oxford: Oxford University Press.
- Long, M. (2003). Stabilization and fossilization in interlanguage development. In C. Doughty and M. Long (eds.), *Handbook of second language acquisition*. pp.487-536. Oxford: Blackwell.
- Stevens, G. (1999). Age at immigration and second language proficiency among foreign-born adult. *Language in Society*, 28(4), pp.555-578.
- (2006). The age-length-onset problem in research on second language acquisition among immigrants. *Language Learning*, 56(4), pp.671-692.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10(3), pp.209-231.

参考資料

- 法務省入国管理局「在留外国人統計」(2015年10月16日公表) [http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001139146] (最終検索日: 2015年10月29日)
- 厚生労働省「平成26年(2014)人口動態統計(確定数)の概況」(2015年9月3日公表) [http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei14/index.html] (最終検索日: 2015年10月29日)

(博士後期課程学生)
(2015年8月20日受付)
(2015年10月7日修正版受付)
(2015年11月9日再修正版受付)
(2015年12月4日再々修正版受付)
(2015年12月13日掲載決定)